説教要旨　「友よ、恐れるな」

ルカによる福音書１２章１～７節

律法学者やファリサイ派の人々から激しい敵意を向けられる中で、イエス様は弟子たちに向けて教えを語られました。その言葉には、弟子たちが迫害を受け、殺されるかもしれない状況が示唆されています。律法学者やファリサイ派の抱いている、イエス様に対する激しい敵意が、弟子たちにも向けられて行くのです。イエス様に従うことで、これから厳しい迫害に晒されて行くであろう弟子たちに向けてイエス様は、「友人であるあなたがたに言っておく」（4 節）と語りかけられるのです。それは、迫害という試練に向かう弟子たちへの慰めと励ましの言葉です。

私たちが本当に恐れるべき相手は、人間ではなくて神であり、その神は「殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方」（5 節）です。死んでから地獄に投げ込まれたらどうしよう、などと不安になる必要はありません。ここで言われているのは、肉体の死を越えて、私たちを完全に支配しておられるのは神なのだ、ということです。神こそが、私たちの人生を、私たちの肉体の命が終わる死においても、そしてその死の後でも、支配し、導いておられる。そのことに私たちの目を向けさせ、神にこそ信頼して生きるようにと教えておられるのです。

五羽でまとめて二アサリオンという、ほんのわずかな金額で売られている雀の内の、一羽のことさえも覚えておられる神は、私たち人間の髪の毛一本までも覚えていてくださる方なのです。ある意味では髪の毛一本までも数えられていることは、恐ろしいことです。私たちは神に隠し事が一切できないということだからです。私たちの知られたくない部分も神はすべてご存じで、それを指摘されれば、地獄に投げ込まれても仕方ないのです。しかし神はそうなさらなかったのです。地獄に投げ込まれても仕方ない私たちの罪を、その贖いとして独り子を十字架に架けることですべて赦してくださったのです。

神がこのような救いを用意してくださった方だからこそ、私たちは信仰を言い表し、神を信頼し、恐れを捨て去ることができるのです。

（２０１９・７・１４　説教者：稲垣真実）